

いざという時のために 地域から

8月3日 子どもが出来る避難と防災知識体験を学ぶ



豊科地域の飯田区と子ども会育成会は、アズミ村田製作所と公民館で子どもが対象の防災イベントを開きました。当日は、地区内の小中学生や高校生、保護者ら43人が参加。区と災害時の協定を結んでいる同社で防災について学んだ後、公民館で防災に関するクイズを行ったり、スナック菓子「じゃがりこ」を使ったポテトサラダ作りなどを行い、楽しみながら防災意識を高めました。武藤鵬煌さん(14)は「大雨が降った時に近くの川などがどうなるかを事前に知り、危険な時は家族に伝えたい」といざという時に必要な行動を考えていました。

肌で感じて学ぶ 水の豊かさ

8月1日 水めぐりツアー

8月1日の「水の日」に合わせて水めぐりツアーが開かれ、親子8組20人が参加しました。当日は、烏川渓谷緑地やゴールドバックあずみ野工場、田淵行男記念館を回り、安曇野の地下水の仕組みと水生生物の生態を学びました。

最後に訪れた田淵行男記念館で、約15度の水が湧く池に入った子どもたちは「冷たい！」「サワガニがいた！」などと歓声を上げ、湧水でしか見られない生き物を次々と捕まえ、講師の解説に熱心に耳を傾けていました。親子で参加した百瀬小夏さん(10)は「烏川渓谷は田淵行男記念館より冷たく感じたけれど、水温が同じと知って驚いた」と話し、安曇野の地下水の不思議を肌で感じていました。



復活の盆踊り いきいきと

8月3日 第41回穂高納涼祭



コロナ禍で中止が続いていた納涼盆踊りが5年ぶりに復活した穂高納涼祭が、穂高会館駐車場で開かれました。参加者は、穂高音頭とHOTAKAサンバに合わせ、躍動感ある踊りを披露。特設ステージではフラダンスや三味線などの発表が祭りを盛り上げました。

祭りのポスターをデザインした立澤晃一さん(穂高商業高等学校3年)は「青色を使い、涼しさを表現した。多くの場所に貼ってもらえてうれしい」と話しました。穂高商工会女性部の矢野口富代さんは「地域の人が集い、交流する祭りが続いてほしい」と願っていました。

うちわを手に 熱く響く祭りばやし

7月27日 第45回あづみ野祭り



「あづみ野ばやし」を踊りながら練り歩くあづみ野祭りが国道147号・豊科駅周辺で開かれました。安曇野太鼓の迫力ある演奏で祭りがスタート。踊り連には、地元の区や企業など35連・約2400人が参加。そろいの衣装や法被を着た踊り手がうちわを振って飛び跳ねると、会場は熱気に包まれました。

毎年、参加を楽しみにしているという宮原^{いちは}苺歩さん(12)は「区みんなで踊りを練習した。今までで一番大きい声と笛の音で盛り上げられた」と話し、妹の李歩さん(8)も「みんなで声を合わせて踊れて楽しかった」と声を弾ませていました。

つらい中に笑い 文士の子としての半生

7月12日 臼井吉見文学館講演会



作家でエッセイストの阿川佐和子さんの講演会が開かれ、満員の500人が話に聞き入りました。この講演会は、阿川さんの母が臼井吉見の教え子だった縁から実現。「言葉遣いの誤りに激怒されるなど、ひどい目にあっただけで今では笑ってもらえるネタになった」と作家としてのプライドを持つ父との過酷な日々のエピソードをユーモアたっぷりに語りました。

阿川さんのファンだという中村朱美さん(豊科)は「本人から直接話を聞けてとてもうれしい。飽きさせない語りであっという間の時間だった」と満足そうに話していました。

リバースポーツの面白さ感じる 急流に乗って

7月21日 リバーボード親子体験会

前川でリバースポーツを親子で体験するイベントが開かれました。当日は、親子5組が上半身サイズに作られた川専用のボード(リバーボード)につかまり足につけたフィンで前川の流れを楽しみました。

最初に、講師から安全に楽しむ方法と乗り方を教わった参加者はすぐにコツをつかみ、急流に設置されたゲートにチャレンジしていました。また、ボードを使わずフィンだけの泳ぎにも挑戦。流れの速い場所に苦労しながらも気持ちよさそうに流れに乗っていました。

父親と参加した安里^{あさとかなた}叶多さん(12)は「初めはできるか不安だったけれど、流れに乗っているうちに楽しくなってきた」と話してくれました。

